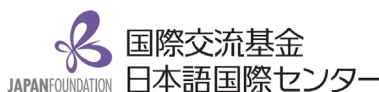


## 日本語教育と文化

### Unit 1 準備 Part 3 異文化理解能力



#### はじめに

みなさんは、異文化理解能力という言葉聞いたことがありますか。それはどんな能力だと思いますか。

## Part3 の目標

異文化理解能力とはどんな能力か、説明することができる

### 1. JF 日本語教育スタンダードの「異文化理解能力」

パート 2 では、<sup>ごかい</sup>誤解を生まないために世界中の見えない文化をすべて知ること、学ぶことは難しいこと、知識として文化を学ぶことには<sup>げんかい</sup>限界があること、そして、知識として文化を学ぶとステレオタイプを生む可能性があることを学びました。では、<sup>ごかい</sup>誤解を生まないためにできることは何でしょうか。ひとつの答えは、「相手の<sup>かちかん</sup>もつ文化、価値観、これまでの経験などの見えない文化を知ろうとすること」でしょう。このような見えない文化を見ようとする態度、想像する力などを、JF 日本語教育スタンダードでは「異文化理解能力」と呼んでいます。

JF 日本語教育スタンダードとは、日本語の教え方、学び方、学習成果の評価のし方を考えるためのツールで、「<sup>そうご</sup>相互理解のための日本語」を学ぶことを<sup>りねん</sup>理念としています。「<sup>そうご</sup>相互理解」、つまり、お<sup>たが</sup>互いに理解しあうためには、「ことば」も必要ですが、「お<sup>たが</sup>互いの文化を理解し<sup>そんちよう</sup>尊重する」ことが大切です。この「お<sup>たが</sup>互いの文化を理解し<sup>そんちよう</sup>尊重する」能力のことを「異文化理解能力」と呼んでいます。



実は「異文化理解能力」のような能力については、今も多くの人が研究を続けています。ですから、どんな能力なのか、詳しく具体的には JF 日本語教育スタンダードにも書かれていません。「異文化理解能力」以外にも「異文化間能力」や「異文化コミュニケーション能力」などの名称めいしょうがあります。このコースでは JF 日本語教育スタンダードに合わせて、「異文化理解能力」を使います。

このように今も研究が続けられていて、能力の呼び方も複数ありますが、異なる文化をもつ人と共に生きるために必要な能力について研究していることは共通しています。また、研究は、多くの人が考える「異文化理解能力」の具体的な要素ようそを出し合い、その共通性を見つけていく方法がよく使われています。

## 2. 「異文化理解能力」をもつ人はどんなことができる？

では、みなさんもちよっと考えてみてください。異文化理解能力をもつ人、つまりお互たがいの文化を理解し尊重そんちょうできる人とは、どんな人でしょうか。どんなことを知っていて、どんな力をもっているのでしょうか。コミュニケーションするときの態度たいどはどうでしょうか。

自由に、自分の考える人物像じんぶつぞうを考えてみてください。

お互いの文化を理解し尊重する

日本語国際センターの研修に参加した世界の日本語教師から出た、「異文化理解能力」をもつ人のイメージをまとめました。もっとたくさんの意見が出たので、これで全部ではありません。みなさんが自分で書いたものと比べてみてください。

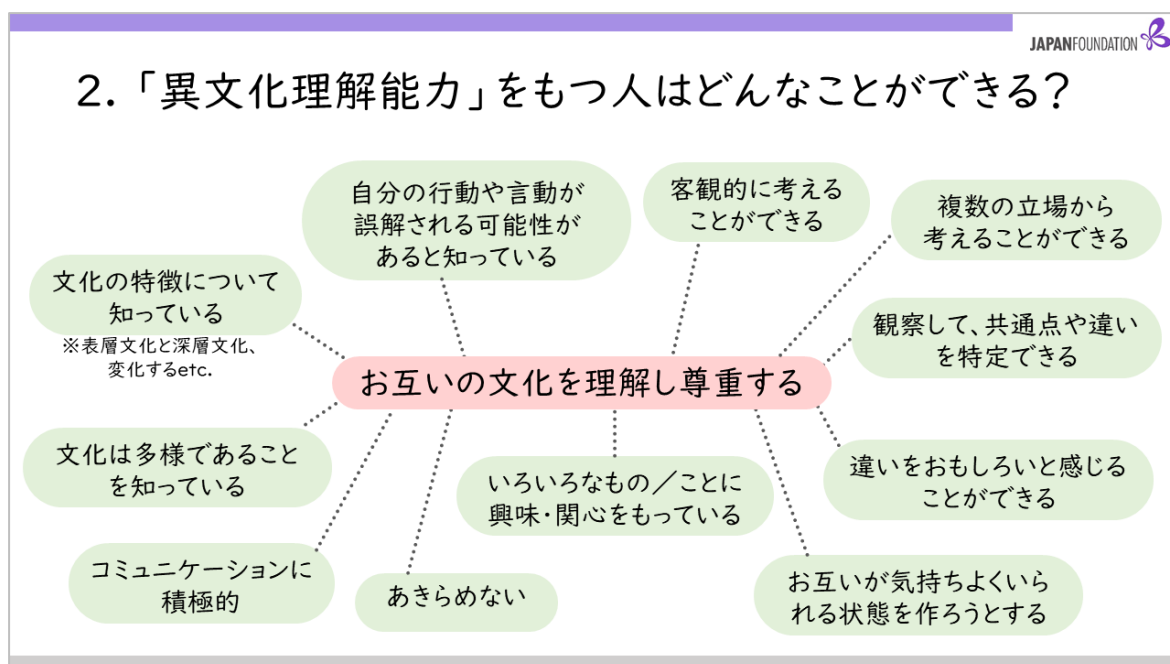
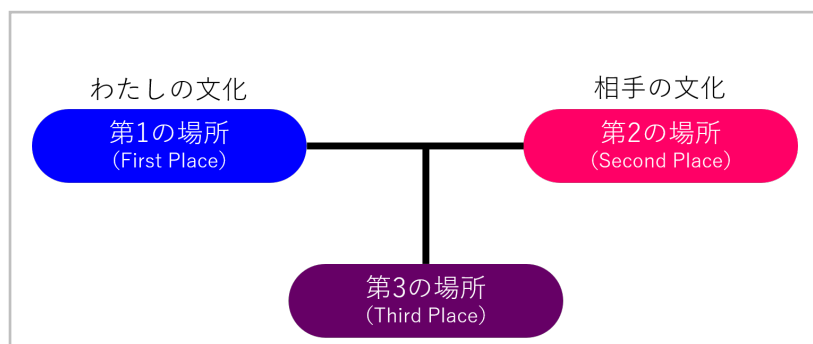


図 1 異文化理解能力をもつ人（日本語国際センターの研修参加者から出た意見の**抜粋**）

さて、この異文化理解能力、つまり、お互いの文化を理解し、<sup>そんちよう</sup>尊重する能力ですが、これは自分の文化を捨てて、相手に合わせることはありません。もちろん、相手に自分の文化を捨てさせるわけでもありません。では、どうすることでしょうか。それは「第3の場所」を見つける能力のような言い方で表されます。つまり「第1の場所（わたしの文化）」、「第2の場所（相手の文化）」のどちらかに合わせるのではなく、新しい「第3の場所」を見つけていくことが大



切だという考え方です。この「第3の場所」は決まっているわけではなく、第1の場所に近いときもあれば、第2の場所に近いときもあります。

図 2 第3の場所 出典：国際交流基金（2020：12）を基に作図\*

\*注：「第3の場所」については、オーストラリアの言語教育の基本方針と関係する研究（Lo Bianco et.al 1999 ほか）を参考にしています。

もう少し、「第3の場所」について考えてみましょう。リサさんとアンさんのことを覚えていますか。この2人はどういう状態だったかという、それぞれが自分の文化にいて、相手の文化に気づいていないといえます。「第1の場所」と「第2の場所」がつながっていないのです。だからトラブルが起きたのですね。

では、この2人はどうすればいいでしょうか。まずは、お互いに自分の思っていることを伝えたり、なぜ怒っているのかを相手に質問したりして、相手のもつ文化を知ることが必要でしょう。相手の文化がわかったら、もしかしたらアンさんは「次からは貸してって言ってみようかな」と思うかもしれませんが、リサさんは「このピンクのペンは嫌<sup>いや</sup>だけど、ほかのペンならOKって言うておこうかな」のように考えるようになるかもしれません。お互いが気持ちよくいられる行動を考えていくと、第3の場所を見つけることができそうだと思いますか。

もう少し考えてみましょう。実はこの2人、似ているところがあるのです。それは、「相手に失礼なことをしたくない」という気持ちを持っているという点です。リサさんは、失礼なことをしたくないから必ず「貸して」と言うし、アンさんは友だちじゃないような行動をすると相手に失礼だと思うから、勝手に使うわけです。このように、目に見える行動は違うのに、目に見えない部分では考え方や価値観<sup>かちかん</sup>が似ていることがあります。この状態を表したのが「文化の島モデル」です。目に見える文化はそれぞれ違っているけれども、目に見えない文化の部分は共通しているということを表しています。このように、目に見えない部分の共通性に気がつくと、相手の文化を尊重<sup>そんちよう</sup>したり、理解したりしやすくなるのではないのでしょうか。

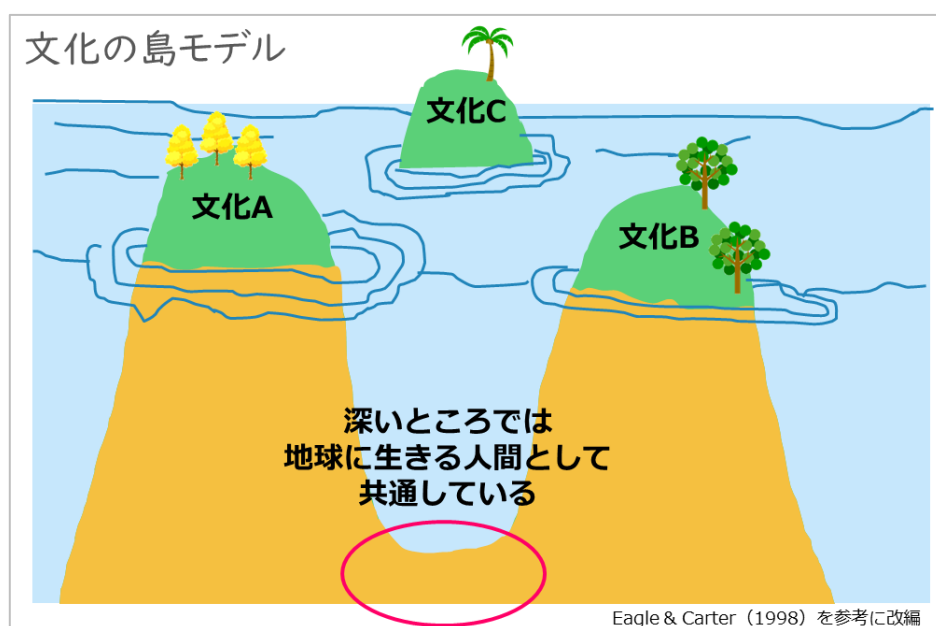


図3 文化の島モデル

### 3. まとめ

ここまで異文化理解能力について見てきました。このパートで学んだことをふり振り返りながら、異文化理解能力とはどんな能力か、自分のことばでまとめてみましょう。

このタスクができれば、このパートの目標は達成です。

#### ■ このパートの参考文献と参考サイト

- ・ 石井敏・久米照元・長谷川典子・桜木俊行・石黒武人(2013)『はじめて学ぶ異文化コミュニケーション—多文化共生と平和構築に向けて—』有斐閣
- ・ 国際交流基金(2010)『日本事情・日本文化を教える』(国際交流基金 日本語教授法シリーズ7) ひつじ書房
- ・ 国際交流基金「JF 日本語教育スタンダード」[https://www.jfstandard.jp](https://www.jfstandard.jp/)
- ・ Eagle, S., & Carter, J. (1998) Iceberg and islands: Metaphors and models in intercultural communication. 『異文化コミュニケーション研究』第10号、97-118. 神田外語大学異文化コミュニケーション研究所
- ・ Lo Bianco, J., Crozet, C. & Liddicoat, A. J. eds. (1999) *Striving for the third place—Intercultural competence through language education*, Language Australia. Ltd. Melbourne.
- ・